

音楽とは 横への感性なり！

ウィーン岐阜合唱団ホームページアドレス <http://www.wiengifu.org>

11月号

2020年11月1日

編集・発行

ウィーン岐阜合唱団

おとたの 岐阜の街 ウィーンの如く 音楽し おとたの 音楽総監督 平光 保 作

コロナ禍の早期終息を

大垣 テナー 宇佐美 利夫

大垣の練習がやっと10月から再開されほっとしています。岐阜では7月から2交代制の変則スタイルで再開されていましたが、大垣から1時間近く通うのは大変なことで、この間、大垣メンバーは退団・休団者が急増してしまいました。

先生方、団長以下スタッフの皆さんの骨折りには、本当に頭の下がる思いです。感染防止のための様々な準備、清掃、工夫、実施事項等々、並大抵の努力ではありません。今後も完全な終息がいつになるか分からないので、苦労が絶えないことと思います。

今年は、遂に合宿も夏の定演も12月の第九定演（ベートーベン生誕250年なのに！）も中止になってしまい、我々も私の数少ないリスナーも非常に残念なことになってしまいました。来年こそ何とか復活でき

ることを祈るばかりです。

最近、といってももう8か月になるコロナ自粛生活が原因か、毎日テレビ・読書・草むしり・パズルゲーム等で過ごすことが多くなっています。自粛生活中には世間ではコロナ太りとか耳にしたことがありますが、私は体力・気力・記憶力の低下と食の細りに悩んでいます。やっと緩和されてきた趣味の教室・地域活動・近県への旅行が楽しみです。

大垣の団員が激減しています。特にテナーは、私一人だけで練習を1回も休むことができません。退団・休団のメンバーには時々声を掛けていますが、皆さんもこれ以上メンバーが減らないように色々な方法で勧誘をお願いします。

「コロナ禍の早期終息を！」と祈るばかりです。



三密から生まれてきた音楽

岐阜本部インスペクター 新田 ひとみ

言の葉

人が演奏し、その場で聴かれる音楽は、三密の中で生まれてきた

現代音楽作曲家 三輪 眞弘

10月〇日中日新聞の第1面冒頭の「言の葉」が目飛び込んできた。今年9月19日サラムンカホールで行われた“岐阜未来音楽展三輪眞弘祭”での彼の言葉である。それは我々の意識のなかにある紛れもない事実だと理解はしていても、三密に敏感な昨今、文字の直視には気が引ける。

予期せぬ新型コロナウイルスが、アーティストや音楽ホールの動きも停滞させ、音楽の発信の場はやむなくオンライン中心となった2020年上半期。音楽芸術の現状と未来に危機感を投げかける、一夜限りの無観客開催・ネット配信となった。従来のサラムンカの来客層はもとより、地球上の様々な人々がネットワーク・システムの端末として、この一夜限りの出来事の証人となったにちがいない。残念ながら、私はそれを見届けることができなかったが。

一方、名古屋フィルハーモニー交響楽団正指揮者の川瀬賢太郎氏は言う。久しぶりに8月に名フィルで振った時、無観客ではなく背中にお客様を感じ、振り返るとお客様がいる。これで演奏会という物語が完結する。世界で一番好きな音は拍手だと感じ、あらためて音楽家として生きていく勇気をもらった。と…

生の演奏はその場にいるからこそ味わえる響きや空気感を、他の人と共有するのが醍醐味。まさに一連択生である。

様々な音楽活動が影響を受けるなか、本来人に元気や勇気を届けるはずの音楽が、悪いものと断じられる。行き場のないやるせなさが曇天の心を支配する。

しかし、コロナ禍を機に音楽のあり方が変わったわけではない。なぜなら、音楽は日常のどこにでもあり、自然と人を癒したり支えたり、普遍的な価値を感じられるものであるからだ。

自粛期間を経て規制が次第に緩和された今、感染防止の策を講じながら合唱活動 Crescendo していってもよいのではないか。手指の消毒、マスクの着用、ソーシャルディスタンスなど、新型コロナウイルスとの長期的な対応にあって、新たな規範は周知のとおりである。この目には見えないウイルスを、わかったふりをするのではなくしっかりとわかり、お互いが安心して安全に合唱活動ができるように、遵守しながら進んでいきたい。

何ヶ月も合唱から遠ざかっていた私の戻る場所には、一緒に歌う友がいる。人との距離は隔てても、心の距離は近づけられるものである。苦渋の休団であっても新たな決意を生み出す力となり、歌に向かう意欲の起点となった。生きる日々は無駄なことは何もないと実感した。

しかし、再び襲うであろう感染波の恐怖を感じながら、練習への参加を控えたのも拭いきれない事実である。揺れ動く心理のなか、これからの合唱団のあり方を模索しながら、その道標となるよう練習を積み重ねよう。

そして、今こそウィーン岐阜合唱団創設の原点に立ち返り、1月21日のニューイヤークンサートが、未来への「希望の光」となって、再起の芽吹きを確かめたい。

コロナに負けないで

大垣アルト 臼井 玲子

コロナ・コロナで半年が過ぎ、もうすぐ1年になろうとしています。“練習が中止になり家でゆっくりと…”と思ったりしたのですが、ここまできると長い休みはつまらなくて寂しい日々でした。やっと団長からの状況説明の手紙やメールが届き、先生をはじめ、スタッフの皆様の思いが伝わってきました。その日から CD で発音をチェックしたり、音を探ったりしました。

8月になり岐阜練習開始。大垣から数名の団員が参加しました。感染予防の為に会場設営は大変なものです。会場貸与の条件に合わせて、消毒、換気、立ち位置等のできる限りのことを工夫し、協力しあってくださった岐阜スタッフの皆様、ありがとうございました。おかげで私たちは気兼ねなく声を出すことができました。

10月になり、やっと大垣練習が始まりました。私達も団長の指導に従い、岐阜の実践を参考に頑張っています。

ところで、あの2m間隔での練習というのは新しい体験です。肩を寄せ合い、隣の声を頼り、不安で自信のない音を、周囲の声の中に隠したりしましたが、2m間隔での練習は、一人で外に放り出されたような緊張感を覚えました。

マスクで歌うのも息苦しいのですが、田中さん達が考案されたフェイスシールドを利用し、大声が出せるようになりました。“大垣の皆さんもどうぞ”と言っていたのが、とても嬉しかったです。その後、い

ろんな商品が出回っていますが、私は最後までこれで頑張ります。

話は変わりますが、私は外出自粛中、時間潰しにテレビの音楽番組を見ることが少し増えました。テレビでは解説付きですから、楽しく気楽に鑑賞できました。そのうちの画面の中の指揮者に引き込まれるようになりました。どの指揮者も出て来られる時の歩み、指揮台に立たれる時、腕を振り上げられる時、最初の音が出された時、これら一連の動きの中に曲の全て、指揮者の全てが凝縮されているように感じたのです。私たちの演奏会の時の平光先生の指揮からも、いつも感じる緊張感です。

さらに、平光先生は指揮棒を使われません。以前に使われない理由を聞いたように思いますが忘れしました。でも、5本の指を使い細かい指示ができる素手の指揮に温かさを感じています。

第九は歌えないけれど、他のプランをお持ちの先生。先生の頭の中は、コロナに負けない渦が回っています。私たちが乗り遅れば、渦は止まってしまいます。練習を重ね、皆で高まり合いながら、先生の渦の中に入っていきましょう。



「中秋の名月」の練習日

岐阜 アルト 所 政子

合唱団練習の時は、17時51分のバスに乗る。この路線バスは混雑することはめったにない。このバスの時間は思索の時間。

猛暑とコロナの夏が過ぎ、彼岸を超えると風も陽の長さも、みるみる秋に変わる。

今日は、10月1日、旧暦の8月15日、中秋の名月なのだ。バスから、ふと東方を見ると運転手の肩越しにびっくりするほど大きく、黄色じみた月が昇っていた。運転手の肩幅がその月にすっぽり収まるほどの大きさなのだ。登り切っていない月は重そうでずり落ちてしまいそうなのである。しかし名月は昼間のざわめきを飲み込みバスの中は何処までも静かで、ドビッシューの「月の光」のピアノ曲の中にいるように思えた。

お月さま、十五夜、月見、うさぎの餅つき、私たちが祈りや感謝、夢やときには悲しみを月に託すように、ヨーロッパにも同じ風習があるに違いない。練習曲「戴冠ミサ」のモーツァルトも同じように月を見、何かを託していたのかもしれない。

Sanctus, Sanctus, Sanctus,
Dominus Deus Sabaoth.
Pleni sunt caeli et terra Gloria tua.
Hosanna in excelsis

静かに昇りくる月が Sanctus, そして祈りが Hosanna in excelsis に共振するように思えた。

「音楽には方向性があります」、「膨らませて!」、「行進曲のようではありません」

先生の言葉の一つ一つが音楽そのものとなり練習に没頭するのでした。2時間ほどの練習が終わり満たされて外に出ると、あの大きく黄色じみた月は高く昇り、青みを帯びた月に変わっていた。

どこまでも静かな月として。



.....

歌いたいという気持ちだけを募らせ、どなたの紹介もなく、2020年2月入団させていただきました。無作法で無謀な私を受け入れてくださいました先生はじめ、スタッフや団員の皆様に感謝しています。今日(10月1日)の練習中、みるみる上達される各パートの皆様にはすごいなと感激している次第です。本当に未熟ですがよろしくお願いいたします。



リトアニア・ポーランド音楽紀行♪2♪ (2018. 5/23-6/2) 川 浪 進

5/24 9:40 ヘルシンキ空港発、1時間余りのフライトでリトアニアのヴィリニュスへ。二つの班に分かれて宿泊。我々はエコテルヴィリニュス。エコテルとはエコロジーのホテルと言う意味かな、違うだろう。

ところで、「リトアニア」と言ってもロシアからさんざん踏みにじられた国と言う他に、なんの知るところもない。フランスと言えはたちどころに、ドゴール、サンサーンス、ヴィクトルユーゴーの国と言うイメージだが、リトアニアはそんな具合にはいかない。そうそうN響指揮者のパーヴォ・ヤルヴィーさんは確かエストニア出身だったかな。と言うくらいで、ことほど左様にバルト三国は日本から遠いのだ。

昼食後、市内観光。杉原千畝公園で「人道の桜」を奉唱、現地の人々が立ち止まってじっと聞き入る。大聖堂などを見学。ここに留まって、終日、絵でも描いてと、いきたいが団体行動はそうもいかない。夕方、地元リトアニア カルチュアー リーダースとの合唱交流会。

リトアニア語はラトビア語と親戚で難解な言語らしい。ありがとうが“アーチャー”、こんにちわが“ラバディアナ”。ラバは「love」、ディアナには「day」の響きがかすかに感じられ、多分、グッド デイくらいの意味かと思うけれど、われわれの耳には全くなじまない。同席した、日本語の堪能な地元大学生によると、「難解三大言語はギリシア語、バスク語、リトアニア語です。」「日本語？易しいです。」と来た。

5/25 早朝、まだ寝ている中根君を起こさないように部屋をそっと抜け出て、朝焼けのなんたら大聖堂を写生。9時、バスでカウナスへ。途中、立ち寄ったトラカイは、かつての首都であり、湖に古城が浮かび、たてようも無い美しさだ。見学をパスして、ちゃかちゃかと描きながら。

ビスタ プオデで昼食、美味しくもなんともない。一旦ホテルへ。パーク イン ラディソン カウナスホテルと言うのが、これから4連泊もするところだ。

午後、カウナスの小中一貫校へ、ここで、事前にいかなる行われたのちから、なん着た生徒や、の生徒たちかに迎えて庭で室内でかな歌や踊も歌で応戦方の劣勢はし難い。なにせ、敵はゆで卵をツルンとむいたような美々しい子たちだが、こっちは渋皮饅頭、むにゃむにゃだもの。



根回しか、先生たと和服を民族衣装が、にこやくれる。校民族色豊り、我が方したが、当如何とも

春爛漫美男美女国理斗亜似亜

この街も由緒ある趣深い建築物が多くて、絵心をかきたてる。ホテルの部屋で中根君と二人、肌着やハンカチ、靴下の洗濯。硬水のせい、泡立ちが悪い。爺さま二人でせっせと洗濯するのは、これはあまり良い景色ではない。

5/26 早朝、近くの セント ミカエル教会を写生。朝食後、市内観光。午後、フィルハーモニーホールで第九のリハーサル、平光氏の指揮は年季がはいっていて、実に上手い。夕方、やっと涼しくなると、数人で街に繰り出し、可憐なウェイトレスを日本の爺達が、さんざんからかいながら夕食。



リトアニアの旅はまだまだ続きます：次号を、お・た・の・し・み・に！！

11月～12月 練習予定

11月からの練習時間は 18:45～20:30 です(18:30)までに集合しましょう)

月 日	岐 阜	月 日	大 垣
11月5日(木)	長森コミュニティセンター	11月6日(金)	大垣市南地区センター
11月12日(木)	長森コミュニティセンター	11月13日(金)	大垣市南地区センター
11月19日(木)	長森コミュニティセンター	11月20日(金)	大垣市南地区センター
11月26日(木)	長森コミュニティセンター	11月27日(金)	大垣市南地区センター
12月3日(木)	長森コミュニティセンター	12月4日(金)	大垣市南地区センター
12月10日(木)	長森コミュニティセンター	12月11日(金)	大垣市南地区センター
12月13日(日)	岐阜・大垣強化練習 長森コミュニティセンター 13:30 ~ 16:30		
12月17日(木)	長森コミュニティセンター	12月18日(金)	大垣市南地区センター
12月24日(木)	長森コミュニティセンター	12月25日(金)	大垣市南地区センター
12月27日(日)	岐阜・大垣強化練習 長森コミュニティセンター 13:30 ~ 16:30		

☆ 練習時間・体制等は、変更になることもありますので、ご注意・ご了承ください。

音楽家の名言～♫～モーツァルト～♫～あなたの演奏を変える127のメッセージより

- * 私たちの財産は、それは私たちの頭の中にあります。
- * 僕は断言しますが旅をしない者は（少なくとも芸術や学問に携わる場合は）実に哀れむべき存在です。
- * 望みを持ちましょう。望みは多すぎはいけません。多くの事をなす近道は一つだけのことをする事。

名前のアマデウスには、ラテン語で、“神に愛される”の意味があるモーツァルトは、神だけでなく世界中の人々に愛された作曲家です。その魅力は謎めいて多岐にわたっていますが、“シンプルな美しさ” “わかりやすく親しみやすいメロディー” “万人を慰め、元気づけてくれるパワー” については、誰しもが感じる場所ではないでしょうか。

生涯で600曲以上の作品を残したモーツァルトですが、手紙や文章なども沢山残しており、作品と同じくらい素晴らしい珠玉の名言があります。演奏者や指導者としても活躍したモーツァルトの言動は的確であり、そのままレッスンのアドバイスに使っても通用するものです。なかでも、注目したい言葉は、「旅をしない者は、哀れむべき存在」であると語っていることです。幼少の頃より、ヨーロッパ中を旅したモーツァルトは、訪れた各地の風土や文化、人との交流によって見聞を広げ、音楽のスタイルや流行もその中で学びとっていきました。自身が体感してきただけに強い説得力を感じさせる名言ではありませんか。



